

Journal of Indian and Buddhist Studies  
(Indogaku Bukkyūgaku Kenkyū)  
Vol. XL No. 2. March 1992

『ヴァジュラーヴァリー』と『マンダラ  
儀軌四百五十頌』

森 雅 秀

## 『ヴァジュラーヴァリー』と『マンダラ 儀軌四百五十頌』

森 雅 秀

I. 『ヴァジュラーヴァリー』 *Vajrāvalī* (VA) はインド後期密教に属する学僧 Abhayākara (11c 後半—12c 前半) による大部のマンダラ儀軌である<sup>1)</sup>。チベットの代表的な歴史書『青冊史』 *Deb ther sngon po* には、この VA の成立に関する次のような記述が含まれる。

のちに Abhayākara が VA を執筆した際、彼は『マンダラ儀軌四百五十頌』に主として依拠したため、彼のこの作品は Jñānapāda 流に属する

これは同書の中の Jñānapāda すなわち Buddhaśrijñāna に関する段落にあらわれ、同じ段落の前半では『四百五十頌』を含む Jñānapāda の著作が列挙される。

VA が Jñānapāda の『四百五十頌』に依拠し、Jñānapāda 流に属するという『青冊史』のこの説は、これまで VA が言及されるときにしばしば紹介されてきたもので、多くの研究者がしたがっている<sup>2)</sup>。ところが、奇妙なことに、『青冊史』の著者 ションヌベルは同じ段落の中で、この『四百五十頌』のテキストがカシミールに持ち去られてしまい、インドにはなかったと述べている<sup>3)</sup>。この『四百五十頌』カシミール散佚説はプトンによっても紹介され<sup>4)</sup>、また Jñānapād: の弟子のひとり Vitapāda (Vidyapāda) も『大口伝註』(TTP, No. 2729) の中で述べているといわれている<sup>5)</sup>。実際、Jñānapāda の『四百五十頌』とよばれる文庫は現存せず、チベット訳も残されていない。

もしこのカシミール散佚説が正しいとすれば、Abhaya はすでにインドに存在しなかった文献にもとづいて VA を執筆したことになる。また ションヌベル自身も『四百五十頌』を参照しえないまま、VA が Jñānapāda 流に属するのは『四百五十頌』に依拠しているからだという説を展開したことになる。ちなみに VA の中には「『四百五十頌』に依拠した」という明確な記述はもちろん、『四百五十頌』という文献名、Jñānapāda の名やこの流派に属する主要な人物名のいずれもあらわれない。

この小論では、Abhaya が VA 執筆のために何を参照したかという観点から

VA の『四百五十頌』依拠説を検討してみよう。

Ⅱ. 現在 Jñānapāda の『マンダラ儀軌四百五十頌』は残されていないが、同じ表題でよばれる文献が別の著者名でチベット訳のかたちで伝えられている。Jñānapāda の直弟子で「現世涅槃の四大弟子」のひとり Dipaṅkarabhadra の『秘密集会マンダラ儀軌』(TTP, No. 2728) がそれである。同書は『マンダラ儀軌四百五十頌』というタイトルは有しないが、チベット訳テキストの末尾には「四百五十の偈頌からなる」と明記され<sup>7)</sup>、実際に450前後の偈が含まれる。

このテキストのサンスクリット写本は現存しないが、末尾の一葉のみがチベットに残されているという記録がある<sup>8)</sup>。タイトルはそこでも『秘密集会マンダラ儀軌』 *Guhyasamājamaṇḍalopāyikā* であり『マンダラ儀軌四百五十頌』ではない。また著者名は Dipaṅkarabhadra ではなく Bhadrapāda とある。

Dipaṅkarabhadra のこの儀軌には註釈書も残されている。ヴィクラマシーラ寺院の六賢門のひとり Ratnākaraśānti による『秘密集会マンダラ儀軌註』(TTP, No. 2734) である。この文献もチベット訳が存在するだけであるが、その終わりには「秘密集会マンダラ儀軌〈世間の耀光〉(‘jig rten snang byed) という四百五十頌への註釈」とあり<sup>9)</sup>、『四百五十頌』の註釈書であることが確認できる。

これらに加えて『四百五十頌』に関連する文献がもう一点ある。やはり Jñānapāda の弟子といわれる Vitapāda の『秘密集会マンダラ儀軌註』(TTP, No. 2736) がそれである。同書の巻末近くには「シュローカで450頌ある」という本文からのことばをひき<sup>10)</sup>、註釈を加えたもとのテキストが450の偈頌からなっていたことが知られる。さらに末尾には「Buddhaśrijñāna のおしえのことばを、正しき師 Bhadra (Bzang po) が解説し、つづいて Vitapāda がそのことばにいささか手を加えた」と記していることから<sup>11)</sup>、四百五十頌本文が Jñānapāda 自身に由来することを主張していたことがわかる。また「正しき師 Bhadra」とは Dipaṅkarabhadra を指すと考えられる。これは、最終葉のみが現存する先述の Dipaṅkarabhadra の『四百五十頌』のサンスクリット写本において、著者名が Dipaṅkarabhadra ではなく Bhadrapāda になっていたことに符合する。つまり、同書は Jñānapāda から Dipaṅkarabhadra をへて伝えられた450頌のマンダラ儀軌への Vitapāda による註釈書ということになる。また同書の末尾には「吉祥秘密集会マンダラの成就法〈世間の耀光〉の註釈書」という記述が含まれる<sup>12)</sup>。この「世間の耀光」という名称は、Ratnākaraśānti があげる Dipaṅkarabhadra の『四百五十頌』のタイトルとしてすでにみたものと同じである。

(190) 『ヴァジュラーヴァリー』と『マンダラ儀軌四百五十頌』(森)

Dipaṅkarabhadra の『四百五十頌』と Vitapāda の註釈書に引用される『四百五十頌』の両者は同一であるとはいえないまでも、きわて近い内容をもっている。Vitapāda の引用文は Dīpaṅkarabhadra の『四百五十頌』の中に対応する箇所をほぼみつけることができ、その順序も両者のあいだにちがいはない。つまり、Vitapāda の使用した『四百五十頌』は、仮に Jñānapāda に由来するとしても、現存の Dīpaṅkarabhadra の『四百五十頌』にたいへん近いものであったことが予想される。

Ⅲ. つぎにこれらの三文献と VA との関係についてみよう。

まず、Dīpaṅkarabhadra の『四百五十頌』と VA について。VA の全体は散文で書かれているが、ところどころに韻文、すなわち偈頌が含まれている。これらの偈頌で Dīpaṅkarabhadra の『四百五十頌』と共通する箇所をさがしてみると、少なくとも30箇所あまり確認できる<sup>13)</sup>。また『四百五十頌』の中で偈頌であらわされていない部分——多くは灌頂儀礼の中で師が弟子にむかって発することば——でVAに一致するところも4箇所ほどある<sup>14)</sup>。これらの一致箇所のうち4箇所は『秘密集会タントラ』の中にも見出すことができる<sup>15)</sup>。ただし、そのうちのひとつは Dīpaṅkarabhadra の『四百五十頌』の中ですでに文章の改変がなされており、VA もこの変更後の偈をひいている。

Dīpaṅkarabhadra の『四百五十頌』と VA との一致数は、VA の中にみられる他の引用文献の引用回数に比べると、他に例のない大きな数である<sup>16)</sup>。VA 執筆のために Abhaya が参照した文献の中で『四百五十頌』が重要な位置を占めていたことがうかがわれる。

つぎに Vitapāda の『四百五十頌註』をとりあげよう。Vitapāda がこの中で引用する『四百五十頌』の中に、今みた Dīpaṅkarabhadra の『四百五十頌』との共通部分は、断片的ではあるが、ほとんど確認することができる。このうち比較的長いものを選び、Dīpaṅkarabhadra の『四百五十頌』と VA のものとお互に比べて比較した場合、三者のあいだでちがいはほとんど認められない。わずかに数箇所でも異同がみられるが、VA がつねに一方と同じ読みを示しているわけではない。つまり、Abhaya が参照した『四百五十頌』が Dīpaṅkarabhadra のものか Vitapāda が用いたものか、ここからは確定できない。

これを明らかにするために、つぎに Ratnākaraśānti の『四百五十頌註』をみてみよう。彼の註も ṭīkā、すなわち語義釈で、Vitapāda と同じように Dīpaṅkarabhadra の『四百五十頌』を断片的に引用し語句の説明をおこなっている。

ところで、VA 中の Dipaṅkarabhadra の『四百五十頌』との一致箇所について、Abhaya は偈頌中の語句の解釈を示している。このような例は全部 8 箇所を確認できるが<sup>17)</sup>、Abhaya の語句の解釈は、ひとつの例外を除いてすべて Ratnākaraśānti の加えた註釈とまったく同じものである。これに対し一方 Vitapāda が加えた註で VA の語句の解釈と一致するものは一箇所もない。このことより、Abhaya は Ratnākaraśānti による Dipaṅkarabhadra の『四百五十頌』の解釈を VA の中で踏襲していたことがわかる。さらに、Ratnākaraśānti の『四百五十頌註』には Dipaṅkarabhadra の『四百五十頌』の全文は含まれないことから、Dipaṅkarabhadra の『四百五十頌』そのものも、Abhaya はわせて参照して、VA を執筆したことになる。

- 1) VA については拙論「Abhayākaraḡupta のマンダラ儀軌 *Vajrāvalī*」『印度学仏教学研究』第 39 巻第 2 号, pp. 856-858 参照。
- 2) Lokesh Chandra ed., *The Blue Annals*, New Delhi, 1976, f. 329, 1-2.
- 3) たとえば羽田野伯猷『羽田野伯猷著作集』第一巻 法蔵館 1986, p. 24, Wayman, A., *Yoga of the Guhyasamājatantra*, Delhi, 1980, p. 95 など。
- 4) Lokesh Chandra ed., *op. cit.*, f. 328, 4.
- 5) Lokesh Chandra ed., *The Collected Works of Bu-ston*, part 26, New Delhi, 1971, f. 470, 3-4.
- 6) 羽田野前掲書 p. 27。ただし筆者はこれを確認できなかった。
- 7) TTP, Vol. 65, 43, 5, 8.
- 8) Sāṅkṛtyāyana, T. R., Second Search of Sanskrit Palm-leaf Mss. in Tibet, *Journal of Bihar and Orissa Research Society*, Vol. 32(1), 1937, p. 28.
- 9) TTP, Vol. 65, 178, 3, 7-8. 10) TTP, Vol. 65, 221, 2, 3-4.
- 11) TTP, Vol. 65, 221, 5, 5-6. 12) TTP, Vol. 65, 221, 5, 7.
- 13) その一部を以下に示す。TTP, Vol. 65, 37, 3, 3-7; 38, 3, 7-4, 2; 38, 4, 5-7; 38, 5, 1-3; 39, 1, 1-5; 39, 1, 7-8; 39, 2, 3-5; 39, 2, 5-8; 39, 3, 6-4, 3; 39, 5, 8.
- 14) TTP, Vol. 65, 41, 1, 7-8; 41, 2, 1-3; 41, 2, 5-6; 41, 2, 6-7.
- 15) 註13) のはじめの三例と 41, 5, 6-7 がこれにあたる。
- 16) Abhaya の自著を除けば、引用回数の多い文献としては、Nāgabuddhi の『マンダラ儀軌二十』(TTP, No. 2675) の 8 回がある程度である。
- 17) TTP, Vol. 80, 89, 4, 4-5; 112, 5, 1-2; 113, 2, 7; 113, 2, 3; 114, 1, 2-3; 114, 3, 7-8; 116, 2, 1-2。これに対応する Ratnākaraśānti の註の該当箇所は、順に 159, 1, 7-2, 1; 159, 2, 6-6; 159, 4, 2-3; 159, 3, 7-8; 160, 1, 5-7; 165, 4, 5-7; 166, 4, 5-7。
- (平成 3 年度文部省科学研究費奨励研究 A による成果の一部)
- <キーワード> Vajrāvalī, 『マンダラ儀軌四百五十頌』, Jñānapāda, Dipaṅkarabhadra  
(名古屋大学助手)